

# 視察先別報告 東ティモール

## 【青年海外協力隊】

### コンピュータ技術隊員活動現場視察

#### 概要

テクノロジー・工業技術専門学校IT学科では、学科長を含め6名のIT教員が学生の指導を行っており、ICT技術が日々発展する中、新たな知識の習得と技術力の向上が必要とされている。しかし配属先の予算の制約もあり、具体的な対策が講じられていない。そこで青年海外協力隊には、学生や教員に対する技術指導、指導内容の計画立案など、幅広い分野で同校の技術向上を図ることが期待されている。

01

大浦 正人 自分の後任を望まず、支援を受けることに慣れないように配慮する青年海外協力隊の塩田さんに強い信念を感じました。時間を守らないことを、ドラスティックに変えられなくても、言葉に頼らず、諦めず、態度で示し、時間を守るように少しずつ現状を変えていく。日本人の支援の在り方を強烈に感じました。塩田隊員には派手さは有りません。言葉に力強さのようなものは感じられませんが、笑みを絶やさず、学生の学力が少しでも向上するように、自分の支援期限の2015年6月末で終わらせるためにその間の活動をイメージし、坦々と、すべき事を精一杯しています。大きくなくても、確実に東ティモールの人達が国際社会で生きていく為の大切な物を残せると思います。

02

太田原 奈都乃 教室内では自ら発言し、真剣な表情で机に向かい、すれ違うと爽やかに挨拶する生徒。彼らはのびのびと学校生活を過ごしていた。衝撃的だったのは、多くの本が並ぶ図書館が閉鎖されていたことだ。ポルトガル語の本が全てであり、学校で使われる教科書も公用語に従ってポルトガル語だが、理解する生徒・教官が少ないため使用されていない。知識や興味関心の「宝庫」である場所が有効に活用されていない現状は残念だ。生徒が利用可能な形に改善するべく策は無いだろうかと考えたい。また塩田隊員は、テスト返却時の意識改革など日々の地道な働きかけによって周囲を少しずつ活動に巻き込んでいた。他ドナーとの連携のあり方も問題となっていたが、「変化」が伝わりやすい子どもの教育現場だからこそ慎重に進めるべきだと思う。

03

川辺 絵梨 「自分の後任は求めない」と話してくださった塩田隊員。支援に頼らず、支援が終わった後も持続できるようにという思いを基に活動されている。まさに日本型の国際協力“自助努力支援”である。上から目線で指導するだけでは、持続性は確保できない。なぜそれが必要なのかを丁寧に説明し、必要性を理解してもらえれば、自ら改善点を見出すことができるようになる。しかし理解してもらうためには、相互理解・信頼関係が不可欠である。塩田隊員は「現地の言語や文化を理解するため、任期中はホームステイをして現地にどっぷりつかるとのこと。また、現地に合わせるだけでなく、日本人ならではの勤勉さを体現しており、その姿勢は現地の教員や学生に良い影響を与えているようだ。

04

木村 みゆき 時間も先生の勤務形態も日本と比較すればルーズ。授業は1コマが45分×4コマ=2時間40分。多くの生徒の数学のレベルは小1~小2レベル相当で、九九は計算ができるが暗記を完璧にできていない生徒が多く、引き算は指を使う生徒もいる。そんな環境の中でも塩田哲平隊員が推し進めた事はネットワークの授業でした。ここでは教える人がいなかったため、1年間だけは授業を行うことにし、2年目以降は、シラバス(学習計画)を作る事を始めました。なぜなら隊員が任期を終えてもずっと続くものである事が大切だからだそうです。現状を嘆くのではなく今できる事の中で一生懸命考える。相当な準備を行い、自らの姿勢を持って示すところに「日本の若者なかなかやるじゃないか」と感動し、日本を支える人材として大きく期待します。

05

後藤 恵美

学内に図書館があるものの蔵書は全てポルトガル語→ポルトガル語が分からない生徒たちは図書館を利用しない→生徒たちが利用しないから図書館は施設されたまま……学内を案内してくださった塩田隊員からその話をお聞きした時、東ティモールという国の抱える課題の複雑さを改めて実感した。世代によって話してきた言葉・受けてきた教育が異なるという事実の中で次の教育をどう考えるか…。複雑な思いを抱きながら学内を見学させて頂いたが、厳しい現実の中でも真剣にそして楽しそうに学ぶ生徒たちの様子を見ることができ、ホッとした。未来を担う子どもたちの教育には今後も引き続き積極的な支援をお願いしたい。

06

塩澄 志麻

「目標は、私がいなくなったあとも続くこと」そう話してくれた塩田隊員。この専門学校は、先生が授業に来なくて急に休校になることもある。1人の先生が続けて3時間授業を行うのは普通。授業を行ったとしても暗記だけの授業が行われていた。その現状の中、常に尊重し合いながら東ティモールの先生に指導方法やテストを行う意義を伝えている。生徒の進路指導も行えるよう、これからデータをとることに。「支援に頼るから後任は要請しない」と語る塩田隊員。その限られた時間で、ミッションを果たそうと懸命に頑張っている姿に感動した。

07

武田 義久

学習環境の整備、教員のスキルアップ、生徒の学力・スキル向上、進学先・就職先の把握と拡充など、目標達成のために多くの活動が必要である中、さわやかな表情で現在の状況を説明してくれた塩田隊員。しかし現状は、基礎教育のレベルが低く、高校1年生、2年生に対し、小学校1年生から2年生程度の足し算や引き算などの授業を実施しなければならない。また、隊員の活動が終了した後の、自立発展性を考慮しながら活動計画を立て、行動する事の大切さを痛感した。そして、ポルトガルの本や機器の提供、勉強会の提供、教師の派遣といった日本政府支援の内容に加え、校舎の全改修、実習機器の提供、教師派遣など他国ドナーの過剰な支援体制を含めて、長期的なビジョンから見ると、日本の支援の在り方を再度検討する必要性があると感じた。

08

田中 香織

教室には大勢の学生が勉強に励み、教師が不在であったクラスでも生徒同士で教え合う姿を目にし、学ぶ意欲の高さを感じた。しかし1コマ3時間という長すぎる授業時間や、中には生活に余裕のない家庭で暮らしている生徒がいるにも関わらず、制服が曜日ごとに3パターンも変わる制服など非効率としか考えられない制度が継続されている点には大変驚いた。塩田隊員はそのような疑問だらけな環境において、変えられない制度には執着せずに、変えられる課題に淡々と取り組まれている姿が印象的であった。「自分が去った後でも継続していく仕組みを作るためには、意義を根気強く説明し先方に必要性を理解してもらうことが重要」と話されており、押しつけではなく真に寄り添った活動をされていると感動した。

09

藤島 誠人

このプロジェクトは、学校の6学科の中のIT学科について実施しており、IT学科教員の教育の質の向上を目指している。IT学科の学生は約100人で教員は6人いる。毎年、この学生の中からポルトガルへ研修に行く者がおり、技術を学ぶ機会を持たせることが良い刺激になっている。また、印象に残っているのは、自分の夢について考えることができない、という協力隊の言葉である。東ティモールでは、職業が少なく、両親の職業も明確ではない。そのため、子どもたちが夢へのイメージがなく、自分の夢を考えることができていないようだ。だから、ここで活動する塩田隊員は夢について考えさせる時間を作ったり、学校がポルトガルなどへの研修をさせたりして職業をイメージできるようにしている。

10

藤岡 裕巳

日本の工業高校のようなイメージの学校であった。6つの学科がある。2014年から新カリキュラムが導入されたため、1年生と2・3年生では1コマで行う授業時間が違うことに驚いた。また、2日に1回制服が変わるようで、生徒たちは3着の制服を持っているという日本にはない風習であった。私たちが視察した時、アクセスの授業を展開されていた。私は商業高校の教員であるが、アクセスを授業で展開したことがないので非常に新鮮であった。東ティモールの生徒たちの頑張りが伝わった。非常に印象に残ったのは、塩田隊員が述べた言葉だ。生徒たちはどんな夢を語りますか?という問いに対して、「夢がないわけじゃありませんが、仕事が少なく職業についてのイメージがつかないようで、〇〇になりたいなどといったことはあまり話しません」と答えたこと。思い描いていた答えとのギャップに驚きを隠せないと同時に、夢をみるイメージが湧かない現実を変えたいと感じた。